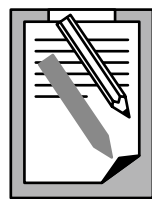


オンライン授業をどう進めたか

——コミュニケーションスキルに面接指導も——

●神戸女学院大学非常勤講師 川邊眺美さんに聞く



新型コロナウイルスの感染拡大を受け、各大学ではオンラインによるリモート授業を余儀なくされた。教員は、どう対応したのか。神戸女学院大学非常勤講師で「キャリアのためのコミュニケーション論」を教える川邊眺美さん(言の葉OFFICEかんの代表)に聞いた。

マンツーマン指導に効果

——オンライン授業を始めた経緯は何ですか。

2020年度の新学期が延期になる中、インターネット交流サイト(SNS)で新型コロナウイルスの存在を知り、各大学の動向をつかむことができず。遠隔授業は避けられないと分かり、早く準備しないといけないと覚悟しました。

——気付いたことは何ですか。

オンライン授業は、マンツーマン指導に適しています。ウェブ面接対策の個人指導をしました。面接される人の印象は、その画面の中で集約され、よく伝わります。画面の背景を少し明るくし、ブラウスのしわに気を付けましょう、人の話を聞いている時に口を開ける癖があるので気を付けまし

よう、などと細かい点を指導することができます。——SNSから得た知恵とは何ですか。

分かりやすいマニュアルが、大学教員グループのSNS上にありました。Zoomの使い方から授業を進める上でのやり方が細かく載っていました。大学教員は非常勤が多く、自宅の脆弱な通信環境の中で授業をしなければならない人が多いです。その中で、最低限どのようなものをそろえて、どのような環境を整えなければならないのかという情報を得ました。



オンライン取材に応じる川邊さん

一方「授業の準備とフォローにこれまでの何倍も時間がかかり、過労死寸前」という声も書き込まれていました。そこで、凝った動画をたくさん配信しようとは思わず、

いつもしているリアル授業に近いものをしようと工夫しました。

——オンライン授業の成果はどうですか。

学生は、見られている自分を意識して、伝えるべきことを発信する、そういうスキルが高まりました。同じ画面に多くの人の顔が映し出されると、感じよく映っている人と、そうではない人の差がよく分かります。感じを良くするためには、明るい服を着たり、カメラを見て話したりすると、話し掛けようとする感じが分かります。

日常生活でカメラを見てしゃべるといのは、あまりありません。人の話を聞く時、画面で相手の表情を見なければいけないので、視線は少し下がりますが「あまり視線を下げ過ぎないように、顔を動かさない程度に」と教えます。

オンライン上で自分を見るところを通じ、画面では自分自身がどのように映り、他人からどのように見られているかが分かります。姿勢、身だしなみ、発声、言葉選び、話し方など、授業のテーマそのものです。

——教室だと教員から見えない場所もありますが、オンラインで隠れることはできませんか。

大学からは「オンラインで『顔出し』を強制してはいけない」と言われています。プライバシーの問題や受講環境の違いがあるからです。しかし、私は通常の授業は顔を出さなくてもいいけれど、必要な時は予告して「次の授業は、ボイスストレーニングをするので、皆さん一人一人に声を出してもらいます。私から表情とか口の開け方を指導で

きるので、できるだけカメラをオンにして参加してください」と伝えました。できない場合は、事前にメールで伝えてほしいと話しました。

――授業中に学生は自分の顔を出さないものなのですか。

自発的に顔を出してくれる学生もいましたが、強制してはいけないと思っていました。ただ、後で感想をもらった中で、「この授業を履修して良かったです。Zoomでの授業は他にも幾つかありましたが、全員が顔出しする授業はこの授業だけだったから」とありました。また「友達を見てみると、自然と元気が出ました」という意見もありました。学生の顔を見られることがうれしかったのだと思います。

画面上は均等割

――想像以上に成果を挙げたことはありませんか。

Zoomは、グループディスカッションでできる機能があって、画面に均等割で皆の顔が出ます。現実の教室では、よく発言する子や友達がいたら、そちらに視線が行きます。オンラインでは、フラットな関係を築けるのです。

相手の表情から、何が言いたいのかを感じ取り、まだこの人は発言してない、目線を下に落としているこの子はまだ議論に入れてないことが分かり、配慮するようになりました。終了後に「振り返り」を提出させると、うまく意見を言えなかった学生に対し、Aさんが「さっきの話をもう一度してください」と振ってくれたので、「もう一度言え

て良かった」というのがありました。また「意見に対してうなずいている人や笑顔の人がいて、力をもらえた」ので「私も人の話を聞く時は、ちゃんとリアクションをしようと思った」というのもありました。学生は、授業で一つ一つ学んでいるのです。

――授業中、教員の体験談などは話せなくなるのも聞きますが。

これまで、授業の前後でいろいろ話す機会はありませんでしたが、オンラインでは余裕が無かったですね。それを解消するためには、授業前にZoomをつないで早めに入ってもらったり、終了後に個別に相談や聞きたいことがあつたら残ってもらったりすることが考えられます。何人かの学生は残って話をしてくれました。

――物足りない部分はありませんか。

オンラインでは、何か予定調和で、想定した授業をこなしているという感じがありました。全員が顔出ししていなかつたら、画面が真っ暗になります。黒い枠の中にそれぞれの名前だけがあるところにしゃべらなければなりません。

授業の内容を集中して話すので、効率的ではあるけれども「つながっている感」がありません。双方向のコミュニケーションを心掛けて、学生の反応を引き出すようにしています。

学生も教員をずっと見ていると疲れます。グループワークや発声練習などを取り入れ、集中力を持続させるようにしました。

――これから初めてオンライン授業をする人への

アドバイスはありますか。

まず、双方向のコミュニケーションを心掛けることです。実際の授業以上に、伝わっているかどうかを意識する必要があります。対面授業よりも余裕を持った授業構成にしなければなりません。一方的に私が話す時間は、長くても15分以内にはしました。また、学生の発言などに対して、リアクションは大きくするということです。安心感を出すことです。

これまで、出欠票の代わりに、「(授業の)振り返りシート」を提出してもらっていました。オンラインでも、メールで提出してもらいました。学生には、多くの課題が出されているので、提出期限には余裕を持たせました。必ず、一人一人にフィードバックしました。学生たちにとってフィードバックは励みになったようです。

――学期末の試験はどのようにしましたか。

3分間の自由テーマでプレゼンテーションの実技試験を行いました。

――授業を通じて分かったことは何ですか。

オンラインでもつながることができました。「コロナ禍でキャンパスに行けなかつたけれども、オンラインのツールを使って、自分自身をちゃんと伝えるということに意識を向け、スキルを身に付けられたと思います。これからの人生を切り開いていく中で、生きる力になるベースです」と伝えました。受講した学生が全員、カメラ目線できちんと笑顔で話すことができるようになりました。

(村田純一 時事総合研究所)